

# 「学校問題」における「子ども／大人」関係の構図と論理 —「いじめ問題」をめぐる言説空間の位相と配置—

池田隆英\*

**要旨** 本研究は、「新しい科学論」の問題意識に立ち、「学校問題」における「子ども／大人」関係の構図と論理を描こうとするもので、本稿では、「いじめ問題」に関する先行研究の知見を対象にメタ分析し、その位相や配置から成る言説空間を後づけた。まず、レビュー論文27本を対象に、「いじめ問題」の「語られ方」を抽出した。その結果、論者の専門領域や関心領域に焦点を当てた知見にいくつかの傾向が読み取れた。しかし、レビュー論文の知見は、現実の「いじめ問題」に活用するには限界がある。そこで、「いじめ問題」の学術論文(1056本)を渉猟してメタ分析を行った。先行研究のテーマは、大別して20項目の「下位カテゴリー」、さらに抽象化した4項目の「上位カテゴリー」に分類できた。レビュー論文の知見を比較するため、「上位カテゴリー」である「現象」、「要因」、「防止」、「予測」によって分析すると、レビュー論文の視野が明らかになった。一方、先行研究1056本を「下位カテゴリー」「上位カテゴリー」で分析すると、「現象」「因果」といった「事後の分析」から「防止」「予測」といった「事前の分析」へと移行しつつあることがわかった。危機管理の問題意識に立てば、「想定外の事態」を回避・軽減するには、「いじめ問題」をめぐる言説を広くとらえ、事態を単純化しないことが重要である。

**キーワード**：言説空間、学校問題、いじめ、「子ども／大人」関係

## 1. 社会的構築性と言説の「実在性」

従来の科学論は、当該の学問分野の手続きによる知見の解明を「客観性」ととらえ、対象とする事物の「普遍性」を追究してきた。一方、「新しい科学論」は、当該の学問分野の手続き自体が社会的文脈の中で作られ、知見の解明はある種の説得の産物であり、科学的営為には常に「恣意性」が作動することを明らかにした。科学信仰への痛烈な批判は、「学際性」を探求してきた子ども研究において、研究対象と自己定位のあり方を不断に検討することを要求する。

科学には、対象概念と方法概念があり、対象を措定して方法で解釈する。科学者を含めた人々の「文法」と「文脈」が、複雑な世界を分節し、了解可能なものにする。観念は、認識の中に閉ざされた単なる虚構(fiction)ではなく、時に矛盾しながら様々な言説を取り込んで更新され、主体(agent)と体制(regime)へと実在化される。この「新しい科

学論」の問題意識は、社会学では、科学社会学(学問)、教育社会学(大学)、職業社会学(学者)として展開が見られるが、教育問題を対象にした研究は少ない。

もちろん、広く構築主義に依拠した研究に目をやれば、社会問題の言説あるいは「語られ方」の研究がある。「いじめ言説」の研究では、いじめに関連する概念の検討(間山、2002)、特定のいじめの事例の検討(山本、2009)、いじめ事件の通時的な分析(桜井、2015)、そして、いじめ言説の接合の分析(山本、1996)を挙げることができる。近年の「いじめ問題」をめぐる状況を想起すると、研究の知見は、今まで以上に、現実の取組を通して「問題」を産出・編成する、社会構築に寄与する可能性が増している。

「緊急提言」(2006)や「推進法」(2013)の後、文科省、自治体、教委、各校での「方針」が策定され、早期発見や再発防止が謳われた。また、学校教

\* 岡山県立大学 保健福祉部

育だけでなく、医療、心理、福祉、警察、法曹、マスコミなども関係する。こうした取組の中で、それぞれの機関や団体は、基準や方針のもとに、独自の活動を行いながら連携も行っている。そして、「学校問題」研究はこうした取組と無関係でなく、研究者が関与し、研究の知見が根拠を与える場合もある。

そこで、「学校問題」における「子ども／大人」関係の構図と論理の産出に関心を寄せ、本稿では、「いじめ問題」をめぐる言説空間を後づける<sup>(1)</sup>。

## 2. レビュー論文にみる言説内容

本項では、「いじめ問題」に関する先行研究の知見をレビューした論文（以下、レビュー論文）27本を対象に、①レビュー対象、②レビュー結果を概観する<sup>(2)</sup>。この作業によって、レビュー論文の位相における「語られ方」を抽出する<sup>(3)</sup>。

なお、レビュー内容を比較するのは非常に困難なため、便宜的に、「レビューの観点」と「レビューの焦点」の項目を設定した。「レビューの観点」としては、研究主題、研究対象、調査方法が多く、その他には、学問分野、文献紹介、レビュー対象があった。また、「レビューの焦点」としては、論文の冒頭では報道や政策などの社会的関心への言及が多く、本論ではいじめの定義やいじめの類型、いじめの要因や影響、いじめへの対応や対策、いじめ言説の展開や構築、といった主題が見られた。

神田（1994）－学問分野

①教育研究文献データベースEDMAR Sでの検索結果で、学会と大学の紀要論文（63本）。②心理学、社会学、体育学、精神医学、教育学という学問分野ごとに先行研究を概観。森田（1985）の提起した「いじめ定義」「いじめ構造」がその後の多くの研究に影響を与えが、問題の実践的解決や病理の実際の解決には、十分に役立たない、との指摘。

鈴木（1995）－研究主題（教育心理学・要因）

①学校内のいじめに関する、主として教育心理学的なアプローチをとる、理論研究と実証研究の学会や大学の紀要論文、教育に関する商業雑誌の論考。②いじめ認識の変遷、いじめの質的変貌、いじめの集団構造、いじめの心理、加害・被害の心理特性、いじめへの態度・価値、いじめへの指導・対策、という区分に沿って先行研究を概観<sup>(4)</sup>。

伊藤（1996）－研究主題（構築）

①教育社会学の主要な論考として、代表的な著書、学会や大学の紀要論文、発表要旨（82本）。②構築主義の「教育問題」研究の変遷について、問題関心、対象、方法とその内実と課題を描いた。「教育問題」の合意論（認識や象徴）、葛藤論（利害の相違）、実践論（相互作用）、通時論（歴史の変遷）をレビューし、「認識論的な意味合い」を強めながら展開した後に「意味世界」という原点に戻ったととらえる。

竹川（1996）－研究主題（現象＋要因）

①学会の紀要論文や学術的な著書や論文だけでなく、教育に関する考察や提言の著書やエッセイを含め、いじめ現象のとらえ方を整理・再考。②いじめを主なテーマとする論考の論点として、「いじめる側の内在的要因」「いじめる／いじめられる対人関係性」「いじめを取り巻く集団全体」「いじめ現象の背景的要因」「いじめの問題化」という5つに区分。

三宅（1997）－研究主題（心理学）

①心理学的な立場から、いじめに関する著書を主なリソースに、日本と欧米の知見を比較。②「いじめ」研究の契機と「いじめ問題」の対策、政策や研究のいじめ定義、「いじめ」研究の調査方法と発生率の関係、という観点で経緯や動向を跡づけている<sup>(5)</sup>。

加野（1997）－研究主題（教育社会学）

①学術的な著書や論文、評論的な著書、「啓蒙雑誌」の論文といった、いじめに関する「代表的な論考」の概略（41本）。②教育社会学の立場から、「いじめの統計と実態」「いじめという解釈枠組」「外国のいじめ研究の性質」「日本の特異な構造」「いじめのアンケート調査の成果」という「いじめの語られ方」を整理・考察。報道や政策の統計の暗数、社会問題の構築性、タイプ分けと撲滅志向、大衆社会の秩序の希薄化と稲作農耕社会の集団主義的な文化。

昼田ら（1997）－時系列の3段階

①学術的な著書、学会・大学の紀要論文、商業雑誌の論考、行政機関の統計や調査結果など（61本）。②事前の「要因・背景」・事象の「現状」・事後の「対策」という時系列の想定で、「いじめ」の

先行研究や実践事例を概観。「現状」には、発生頻度、時間・空間、特徴・構造・方法、後遺症、「要因・背景」には、子どもの特徴、家庭の特徴、学校教育の歪み、国・地域・メディア、「対策」には、スウェーデンやイギリスでのプログラムが、挙げられている。

神村・向井（1998）－学校段階と研究主題（要因）

- ①カウンセリング研究の立場から、心理学、教育学、精神医学などの学会や大学の紀要論文、発表要旨、関連書籍のうち、いじめに関する実証研究（98本）。
- ②小学生・中学生・高校生を対象にした研究、大学生・専門学校生などを対象にした研究、いじめ経験と心理・社会的問題行動との関係、いじめへの社会心理学的アプローチ、そして、いじめに対する介入、という5つの区分による整理<sup>6)</sup>。

三浦（1998）－研究の展開過程

- ①欧米と日本における研究の展開過程の違いを考慮しながら選定された、学会や大学の紀要に掲載された論文や学術的な著書（41本）。
- ②社会病理や社会問題に関する研究の展開過程として、構築主義に至る前段階に着目し、原因論、ラベリング論（相互作用論）、フィードバック論、という3つのアプローチを概観し、課題を検討している<sup>7)</sup>。

齊藤（2000）－研究主題（観点の分類）

- ①学会の紀要論文、学会の発表要旨、大学の紀要論文、代表的な著書、商業雑誌の論文（72本）。
- ②「事象を扱うときの観点の分類」として、「実態を記述する研究」、「現象を説明する研究」、「構造を記述する研究」、「性質を記述する研究」、「問題の措定に対する批判理論」という5つに分類。

寺田・齊藤（2000）－研究主題（要因）

- ①いじめとストレスの関連についての学会や大学の紀要論文と学術的な著書（24本）。
- ②「現在の「いじめ」の実態・形態」、「児童・生徒のストレス研究」、「いじめに関する研究動向」、「学校ストレスといじめの関連性」に区分して、先行研究の知見を概観<sup>8)</sup>。

藤生（2001）－文献紹介（海外）

- ①「いじめ (ijime)」の英語訳「bullying」を用いる海外の学会の紀要論文や学術的な著書（73本）
- ②心理学（カウンセリング研究）の立場から、「いじめの定義」、「いじめの種類」、「いじめ研究の歴史」、「いじめに関する知見」、「日本のいじめの特色」、「いじめへの対応」という6つの区分で、教師の基本的知識として主に海外の先行研究を概観。

鈴木（2001）－概観と提起

- ①『学校におけるいじめの心理』以降、問題としてきた事項について、筆者自身の歩みを簡潔に振り返り、整理する出発点として位置づける。いじめに関する先行研究として、学会や大学の紀要論文、学術や啓蒙の雑誌論文（66本）。
- ②「いじめの今昔」、「いじめ事象の多様性」、「いじめの概念・定義」、「いじめ認識と人生観・人間観」、「いじめ発生の場（学級）」、「いじめの原因といじめへの対処」と区分し、先行研究の知見を概観。

原・濱口（2002）－測定法

- ①主に海外のいじめ研究である学会の紀要論文や学術的な著書（31本）。
- ②「自己報告法と他者報告法」と「いじめ形態と測定」に分け、測定方法と測定内容の課題を主に海外の研究に依拠して指摘している。すなわち、前者の項では被験者の反応（回答）が報告法によって大きく異なる、との指摘を概観している。また、後者の項では、攻撃行動には性差が見られ、質問項目の内容によっては性別に偏りのある回答しか得られないことを指摘している。

大野（2003）－研究動向（現象＋要因／構築）

- ①文部省や警察庁の資料のほかに、学会や大学の紀要論文、学術的な著書、商業雑誌の論文（52本）。「いじめ定義」では、学術的な研究の定義や省庁の行政上の定義から5点の特徴を挙げている。「いじめの原因」では、個人的・心理的原因論、総花的要因論、四層構造論を概観。「新たな問題のとりえ方」では、社会構築主義の知見を概観。

友清（2004）－加害者研究（現象＋要因）

- ①いじめ研究のうち、加害者に関する先行研究を中心に、学会や大学の紀要論文、学術的な著書、商業雑誌の論文（31本）。
- ②いじめの加害者に焦点を当て、「加害行動」、「加害者の特性」、「教師の認

識」、「加害者への対応」、という4つに区分して概観。

戸田 (2010) - 論文形態と「地域」(心理3学会)

①2009年度の教育心理学会の「総会発表論文」、2008年7月から2009年6月末までの教育心理学系の3つの「学会誌掲載論文」、「いじめ理解といじめ対策」の諸研究。②論文の形態によって分類した「総会発表論文」と「学会誌掲載論文」、海外と日本という「地域」によって分類した「いじめ理解といじめ対策」の研究動向を概観している。

久保田 (2012) - 研究主題 (現象+要因+影響)

①先行研究として、学会や大学の紀要論文、学術的な研究の著書だけでなく、評論家による著書も(35本)。②いじめに関する研究について、「いじめの定義と行為」「発生要因と学級集団」「心身へのいじめの影響」という3つの区分に従って先行研究を概観し、最後に「研究の課題」を指摘している。

小林・三輪 (2013) - 定義と対策

①いじめ定義の動向では代表的な論文や著書(6本)、いじめ対策の動向では過去20~30年分の心理学系の学会の紀要論文(23本)。「いじめ対策」として、23本の先行研究は、1)被害者・加害者の特性や傾向、2)いじめ行動の背景要因や抑止条件、3)予防的な取り組み、4)いじめへの対処・解決、5)回復や治療の方法、6)いじめ定義やネットいじめ、という6つのカテゴリーに整理されている<sup>(9)</sup>。

三輪ら (2014) - 対策 (予防・介入・再生)

①主に心理学系のいじめに関する研究として、学会・大学の紀要論文や学術的な研究の著書(38本)と学会の発表要旨(19本)。まず、学年や学校段階といった「発達観点・視点」ごとに先行研究を区分し、この区分に沿って、行動、構造、時期といった「いじめの様態」に関する知見を概観。そのうえで、「予防」「介入」「再生」という新たな「研究の枠組み」(小林ら、2013)ごとに、「発達観点・視点」から「いじめ対策」を考察。

鈴木・上地 (2014) - 未然防止 (一次予防)

①いじめに関する文書として、辞典、省庁の資料、

学会や大学の紀要論文、学術的な著書(79本)。「いじめ研究の現状」としては、「いじめ定義」「いじめの件数」、「いじめの構造」「ネットいじめ」、「社会問題化の経緯」「海外との比較」といったテーマで先行研究を概観。また、「いじめ研究の課題」としては、予防医学の観点から、一次、二次、三次の3段階の予防に分けた対策の必要性を説く。

下田 (2014a) - 小中学生・経験率と知見

①CiNiiとJ-STAGEで「いじめ」を検索語に抽出された、2001年から2013年7月末時点までの先行研究(92本)。整理するにあたっては、小学生、中学生、教師、ネットという分類により、「いじめの経験率」「調査研究によるいじめの心理学的知見」を概観するとともに、「学校でのいじめへの取り組みに関する知見」として、「より一般的な取り組み」と「より心理教育的な取り組み」を紹介している<sup>(10)</sup>。

下田 (2014b) - 小中学生・定義と経験率

①CiNiiとJ-STAGEで「いじめ」を検索語に抽出された、2001年から2014年3月末時点までの論文(97本)。下田(2014a)と同じく、従来型いじめとネットいじめに分けられており、これらを目安にして、まず「レビュー論文におけるいじめ定義」が概観され、つぎに、「実証研究におけるいじめ定義」について、独自の操作的定義、既出の定義の引用、などが紹介され、そして、「実証研究におけるいじめ経験率」では、小学生・中学生の従来型やネットのいじめ経験率の研究が概観されている<sup>(11)</sup>。

亀田ら (2014) - 調査方法 (学会の紀要)

①日本の心理・教育の「中心的な」学会の紀要(10誌)から2005年~2014年の論文(27本)。②論説・レビュー(7本)、質問紙法(11本)、面接法(1本)、個人の事例・実践(6本)、集団の事例・実践(2本)。調査方法ごとの分類にはいるが、論文の内容ではなく、論文の「タイトルの傾向」からの読み取りをしており、2頁ほどの「概説」。

亀田ら (2015) - 調査方法 (大学の紀要)

①日本の大学(短期大学含む)の紀要から、2005年~2014年の論文(133本)。②論説・レビュー(60本)、質問紙法(57本)、面接法(8本)、個

人の事例・実践（8本）。論文数の経年変化を掲載しているが、それ以外は、亀田ら（2014）と同様、調査方法ごとの分類になっているものの、論文の内容でなく「テーマ」だけが2頁半ほどの「概説」。

レビュー論文では、論者それぞれの専門領域や関心領域に焦点を当てて概観がなされ、いくつかの傾向を読み取れる。ここに挙げたレビュー論文の数を年代別に見ると、1990年代には11本、2000年代には7本、2010年代には9本、となっている。主な執筆者の立場を学問分野で見ると、最も多かったのは心理学系の16本、つぎに多かったのは社会学系の9本、そして医学系の2本となっている。レビュー対象となるリソースは、政府機関のドキュメント、代表的な学術書、学会の紀要論文、学会の発表要旨、大学の紀要論文、商業雑誌の論文などである。レビュー対象の本数は、最小値24、最大値133、平均値59.9、標準誤差5.54、50本未満のレビューが13本、50本以上のレビューが14本、となっている。

### 3. 研究紀要にみる「いじめ問題」言説

#### （1）先行研究のメタ分析の方法

「いじめ問題」のレビュー論文の内容を概観したが、「いじめ問題」についての「語られ方」を総合して理解するには、レビュー論文では限界がある。それには、主に2つの背景があると考えられる。

1つには、前項で補足的に確認したように、レビュー論文の内容は、「レビューの観点」と「レビューの焦点」に整理しても、レビューされている研究主題は多岐にわたる。2つには、レビュー論文は、何年かに一度のものであるためレビュー論文の「期間」や「本数」にばらつきがあり、対象とする先行研究の「領域」や「主題」には移り変わりもある。こうした背景があるため、レビュー論文をリソースとすると、限定された情報の内容に踏み込むことはできても、他の先行研究の情報を十分に把握できない。

従来の研究のあり方としては、このようなレビュー論文の作法そのものには何ら問題はない。しかし、研究の知見を現実の「いじめ問題」に活用する際、こうしたあり方は不十分である。「いじめ問題」が生起している場では、様々な事象が複合的に関係している可能性がある。いじめの情報収集や課題分析が求められる場合、様々な言説がどのような

空間を成すのか、全体的な布置を知る必要がある。こうした問題関心から、「いじめ問題」に関する先行研究を渉猟してメタ分析を行う必要がある。

分析対象は、「CiNii」のタイトルに「いじめ」を入力した検索結果である。最終的な採取は2016年5月10日であり、ヒットした件数は6419件であった。このデータには、児童生徒、教師、保護者など「学校関係者」以外の領域や属性も含まれ、かつ学会や大学など「研究紀要」以外の媒体や種別も含まれた。そのため、これらを除いた1056件のデータを「いじめ問題をめぐる学術的な論文（以下、いじめ問題の先行研究）」としてメタ分析した結果を報告する<sup>(12)</sup>。分析に際して、以下の4つのステップを踏んだ。

手順①…「CiNii」の検索結果から「EndNoteより書き出し」の機能を使ってテキスト形式に保存。

手順②…検索結果の最大表示件数（200件）を保存したファイルをテキストエディタで統合。

手順③…統合したファイルを表計算ソフトに呼び出し、「書誌名」「項目名」でデータを整理。

手順④…プルダウンリスト化した「カテゴリー」で整理後のデータを分類し操作データとした。

表1 先行研究の分類のためのカテゴリー

いじめの「現象」	読解解釈	背景・経緯・課題の考察 社会問題の構築
	定義類型	いじめ定義 いじめ類型
	国家権力	法令（司法・立法） 行政（文科・警察）
	国際ネット	国際（実態・参照） サイバー
いじめの「因果」	要因	児童生徒・学生の認識 教師・保護者・市民の認識
	影響	個人（心理・行動）への影響 社会（環境・意識）への影響
いじめの「防止」	教育育成	教育（指導・実践） 育成（養成・研修）
	介入開発	介入（相談・治療） プログラム・プロジェクト
いじめの「予測」	当事者	評価ツール 疑似体験ツール
	測定者	結果のシミュレーション コスト計算

## (2) レビュー論文の視野

レビュー論文の章や節のタイトルあるいは本文の説明には、先行研究の知見を分類する必要があるため、執筆者それぞれが考案した「分類ラベル」がある。この「分類ラベル」が当該の学問分野に共通する専門用語であるとは限らないため、この「分類ラベル」だけではレビュー論文で概観された内容を比較対照することが難しい。そのため、前項でメタ分析の対象とした「いじめ問題」に関するレビュー論文を整理するにあたっては、学術論文の扱うテーマをカテゴリー（表\*）として用いて分類した。

「いじめ問題」をめぐる言説空間の構成要素ごとに見ていく。いじめの「現象」については、いじめ定義10、社会問題の構築9、背景・経緯・課題の考察8、いじめ類型7、と続いている。これらとは対照的に、国際、サイバー、行政（文科・警察）、法令（司法・立法）という研究主題の先行研究は、ほとんどレビューされていない。また、いじめの「要因」については、児童生徒学生を対象にした要因分析が21と最も多く、これ以外には、個人への影響8が若干多いものの、「大人」の認識、社会への影響は、ほとんどレビューされていない。さらに、いじめの「防止」については、心理学的な研究の影響であろうか、被害者や加害者への介入9、指導や実践などの教育7、プログラムやプロジェクト6、とやや少なめになっており、養成や研修に至っては1である。なお、いじめの「予測」については、先行研究の蓄積が少ないためか、シミュレーション1本だけである。

このように、レビュー論文では、対象となる先行研究に「偏り」がある。先行研究の範囲が狭ければ、調査対象の理解も十分でなくなる。しかも、その研究者が学校に関わる際、事実確認や課題分析に偏りが生じる可能性さえある。

## (3) レビュー論文で指摘された「課題」

先にレビュー論文での知見を概観したが、これらの論文では、その研究領域での「課題」について、重要な指摘がなされている<sup>(13)</sup>。

齊藤（2000）が言及するように、実証研究のうち、規範主義は統計的な手法によって「認識の一致」を前提するが、いじめが生じる相互作用の過程では「認識の一致」が必要条件ではない（北澤、1996）。

三宅（1997）が指摘するように、調査方法や質問項目が異なれば、得られる回答や結果は異なる。「いじめ」研究の調査方法と発生率把握の関連性を検討したという点に、この論考の特徴がある。

藤生（2001）が言及したように、「選択（牽引）／排斥（反発）によって描かれる構造は、攻撃性との関連が確認できない以上、いじめの指標とはならない。」（Olweus, 2001 : pp. 7-10 / 筆者訳）。

神村・向井（1998）が指摘するように、学校段階や発達過程によっていじめの様相も異なる。そのため、研究対象による整理は、「発達の過程での異同」による対象理解を考える際には参考になる。

神田（1994）が指摘するように、いじめという現象は非常に複雑なものであるから、「いじめ」という上位概念を利用するだけでなく、それが内包する下位概念を明確にして先行研究の整理が必要であろう。

伊藤（1996）が提起したように、「問題とされているカテゴリー及び「教育」の意味内容が実体化し、それらが教育としてなされる日常的な営みや、広く社会に対してまで力や機能を及ぼしていくプロセスを明らかにすること」は、改めて強調したい。

池島（2009）は、学校教育臨床の視点から、いじめの介入や支援の研究の必要性を説く<sup>(14)</sup>。これは、従来の多くの研究が共時的な把握であったのに対し、通時的な把握を要請する<sup>(15)</sup>。

各論者は、個別の研究領域の重要な課題を指摘することで、その限界や展望を示す。しかし、あくまでも個別の研究領域に限定されている。そのため、より広い視野での課題は明らかにされていない。

## (4) 「いじめ問題」言説の要素と推移

「研究紀要」における「いじめ問題」言説の推移は、1985年頃から約10年ごとの「3つのピーク」とされる動向と5～10年の後を追う形になっており、「分野」ごとの特徴は以下の通りであった。

「現象」に分類できる先行研究には、大別して2つの種類がある。1つは、いじめの背景や課題を考察する研究であり、もう1つは、いじめそのものを考察する研究である。いじめ研究のなかでは、比較的多い領域となる。なお、社会問題（言説）、法令（司法・立法）、行政（文部・警察）、国際（実態・参照）を扱った研究は比較的少なく、サイバーいじめの研究は近年増加傾向にある。

表2 レビュー論文の視野と個別論文の推移

	いじめの「現象」								いじめの「因果」				いじめの「防止」				いじめの「予測」				合計
	読解・解釈		定義・類型		国家の権力		国際・ネット		要因分析		影響分析		教育・育成		介入・開発		当事者		測定者		
	背景・経緯・課題の考察	社会問題の構築	いじめ定義	いじめ類型	法令（司法・立法）	行政（文科・警察）	国際（実態・参照）	サイバー	児童生徒・学生の認識	教師・保護者などの認識	個人への影響	社会への影響	教育（指導・実践）	育成（養成・研修）	介入（相談・治療）	プログラム・プロジェクト	評価ツール	疑似体験ツール	結果のシミュレーション	コスト計算	
レビュー論文	神田(1994)			✓																	1
	鈴木(1995)	✓							✓				✓								3
	伊藤(1996)		✓																		1
	竹川(1996)	✓	✓						✓												3
	三宅(1997)	✓		✓			✓														3
	加野(1997)	✓	✓				✓		✓												4
	昼田ら(1997)								✓		✓	✓									3
	神村・向井(1998)								✓		✓										2
	三浦(1998)		✓						✓												2
	三浦(1999a)		✓						✓												2
	三浦(1999b)		✓						✓												2
	齊藤(2000)	✓	✓		✓				✓												4
	寺田・齊藤(2000)								✓		✓										2
	藤生(2001)	✓		✓	✓		✓		✓	✓	✓		✓		✓	✓					10
	鈴木(2001)	✓		✓	✓				✓												4
	原・濱口(2002)			✓	✓				✓												3
	大野(2003)	✓	✓	✓	✓				✓												5
	友清(2004)				✓				✓	✓			✓		✓						5
	戸田(2010)						✓		✓	✓	✓		✓	✓	✓	✓					8
	久保田(2012)			✓	✓				✓		✓										4
	小林・三輪(2013)			✓											✓	✓					3
	三輪ら(2014)												✓		✓	✓					3
	鈴木・上地(2014)		✓	✓			✓	✓					✓		✓	✓			✓		8
下田(2014a)							✓	✓	✓			✓		✓	✓					6	
下田(2014b)			✓					✓												2	
亀田ら(2014)								✓		✓				✓						3	
亀田ら(2015)								✓		✓				✓						3	
合計	8	9	10	7	0	1	4	2	21	4	8	1	7	1	9	6	0	0	1	0	99
個別の論文	1976-1980	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	1981-1985	3	1	2	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	2	0					13
	1986-1990	17	1	7	2	2	0	0	29	2	2	3	0	3	0						68
	1991-1995	8	1	2	11	1	3	0	13	0	6	8	0	4	0						57
	1996-2000	44	19	23	16	1	11	2	65	9	15	26	4	14	4						261
	2001-2005	9	6	6	6	0	3	0	45	9	9	14	2	10	4						126
	2006-2010	23	6	21	8	2	2	14	41	6	13	12	2	17	5						176
	2011-2016	26	18	24	23	8	10	26	41	11	26	41	10	9	22						309
	合計	130	53	85	66	14	29	42	239	37	71	104	18	59	35						1011

「因果」に分類できる先行研究には、要因分析と影響分析、という2つに大別できる。要因分析として、1つ目は児童生徒を対象にした要因分析の調査、2つ目は大学・短大などの学生を対象にした要因分析の調査、3つ目は教師・保護者・市民を対象にした調査がある。また、影響分析としては、いじめによる影響分析の調査があり、「因果」の研究では後発の領域である。

「防止」に分類できる先行研究には、大別して2つの種類がある。1つはいじめの予防となる教育（指導・実践）や育成（養成・研修）、もう1つはいじめの抑止となる介入（相談・治療）やプログラムである。教育（指導・実践）や育成（養成・研修）はいじめ発生の前に備えるものであり、介入（相談・治療）やプログラムはいじめ発生後も働きかける継続的な取り組みを指す。

「予測」に分類できる先行研究には、当事者による予測と観察者による予測との2つの系統がある。当事者による予測は、評価ツールの研究と疑似体験ツールの研究とがあり、観察者による予測は、いじめによる結果のシミュレーションの研究とコスト計算の研究がある。なお、他の領域に比べ、「予測」研究は極端に少ない。

学術論文における「いじめ問題」をめぐる言説から、「現象」「因果」「防止」「予測」という4つの要素を抽出できる。それぞれの要素の中での多寡はあるにしても、学術論文における「いじめ問題」をめぐる言説は、概ね、「現象」や「因果」といった「事後の分析」から、「防止」や「予測」といった「事前の分析」へと拡大しつつある。次項では、これらを配置することで、全体像を描くものとする。

#### 4. 「いじめ問題」をめぐる言説空間の位相と配置

ここまでの作業で、「いじめ問題」をめぐる言説による「認識の地図」が描けそうである。「いじめ問題」をめぐる言説は、「垂直的なとらえ方」と「水平的なとらえ方」ができる。これを1つの理念型として提示すると、その概念図は、以下のように表現できる。

「垂直的なとらえ方」をすると、1つひとつの論文の「個別の知見」があり、これらをレビュー論文が「知見の整理」として考えると考えられる。しかし、こうした整理のあり方は、ある専門の「領域」に限定されたものである。そこで、「水平的なとら

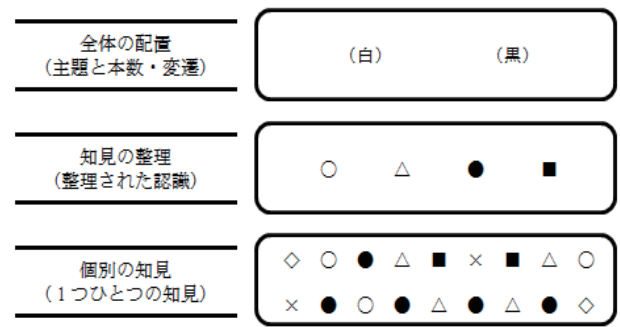


図1 言説空間の理念型（概念図）

え方」をすると、1つひとつの論文の「個別の知見」をカテゴリー化し、抽象度を高めた「全体の配置」を抽出することも可能である。「垂直的なとらえ方」で見える場合には「位相」と表現でき、「水平的なとらえ方」で見える場合には「配置」と表現できる。これらが総合的な空間をなしている状況を言説空間と名付けることができ、その位相や配置が確認できた。

全体的な布置としては、いじめの「現象」が中心にあり、分析を志向すると「要因」や「結果」が、防止を志向すると「予測」や「予防」が配置できる。「いじめ問題」言説は、これらの要素が選択的に採用され、下位概念として組み込まれ、成立していると考えることができる。本稿で、特に注目したのは、研究者による認識と実在の関係である。

- これらの対象概念や方法概念は、対象理解をする際には「有標／無標」を作り出す。
- それぞれのカテゴリー・ラベルは、研究上の対象概念や方法概念としての意味をもつ。
- 「いじめ」をめぐる言説が全体的布置を形成し、研究者により要素や関連が選択される。
- 研究者が特定の対象概念や方法概念を採用して「いじめ問題」の実在化に寄与する。

原点に戻れば、言説は「1つの出来事（あるいは人、あるいは人びとの種類）について描写された特定の像、つまりそれないしそれをある観点から表現する特定の仕方」である（バー、1995 = 1997）。筆者は、私たち研究者自身も社会的存在であることを意識する必要性を感じる。すなわち、「いかなる社会学者も自分の研究対象者の世界を解き明かすために苦勞するが、同時に、社会科学の理論的世界もまた、同じ研究対象者によって社会的アクターとしてのその人なりの能力のなかで解き明かされ、解釈されていることを常に意識しなくてはならない」



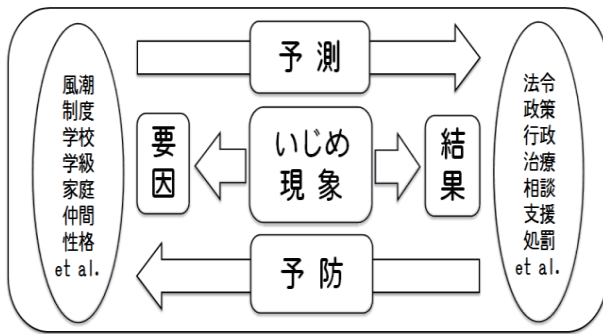


図2 「いじめ問題」をめぐる言説の配置

ということである (Cassell, 1993; Prasad, 2005 = 2018)。

「推進法」(2013) では、早期発見や再発防止への取り組みとして、校内での「いじめ対策委員会」や外部者も入れた「いじめ問題対策連絡協議会」の設置が謳われている。こうした社会的な要請に対して、学校がいじめに対応する際、学校経営や学校問題の「専門家」が危機管理の体制に組み込まれる可能性がある。そうなれば、学校や第三者機関による情報収集や課題分析に関連して、資料作成や事例検証に関与する際、研究上の知見を活用することもあると思われる。ここで、危機管理の問題意識に立てば、「想定外の事態」がいじめの事前・事後に発生した場合、事態は回復に向かいづらくなる (古田、2017)。これを回避するには、「いじめ問題」をめぐる言説を広くとらえ、事態を単純化しないことが重要である。

本稿では、「いじめ問題」の言説を対象に、その位相や配置から成る言説空間を把握した。これは、「いじめ問題」において、それに対応する機関や関係者が想定する構図や論理を批判的に検討するための基礎的な資料を提供するにすぎない。今後、言説空間の要素であるそれぞれの「分野」で、どのような構図や論理が想定され、どのような「いじめ問題」言説が産出されているのか、具体的に検討したい<sup>(16)</sup>。

注)

1) 言説空間という用語は、筆者のオリジナルではなく、様々な学問分野での言説研究で使われてきたものであり、教育社会学では高旗 (1997) や石飛 (1998) を挙げることができる。

2) いじめへの言及が少ないものは、メタ分析の対

象から除外した。たとえば、伊藤 (1996)、伊藤・千原 (1998)、市川ら (2007) は、文献の紹介や一覧のみになっている。樋田 (2013) は、いじめを含め全体をとらえるレビューだが、かなり単純化されている。田中・高木 (2004a) と田中・高木 (2004b) は、学校病理を主題に、前者が海外、後者が日本の研究を概観しているが、いじめ研究への言及は少ない。

3) レビュー論文でも、個別の論文でも、「問題の設定」では、社会的意義や研究的意義を述べる際に、しばしば「注意の喚起」を促す。たとえば、「報道 (事件)」「政策 (対策)」「実態 (統計)」などが紹介され、ここに埋め込まれた「説得のロジック」がある。

4) タイトルにはあるが、いじめ定義と発生機序 (要因分析) については十分にレビューされていない。ただし、研究が多く産出されていない当時の状況としては、これが限界であったと考えられる。

5) いじめが報道によって「いじめ問題」が社会的に認知され、これを契機として政策上の課題として「いじめ問題」への対策が立ち上がり、この過程や延長に様々ないじめ定義が混在することになった。

6) それぞれのまとめの後には、研究上の課題や限界が指摘されている。最後の項では、これらの指摘を受けて、いじめ定義の必要性和困難さ、いじめの分類法の確立の必要性が考察され、さらに、相関研究や疑似実験研究の必要性が提言されている。

7) 三浦 (1999a) では、構築主義として、伊藤 (1997) や北澤 (1997) を紹介し、また三浦 (1999b) では、学会や大学の紀要に掲載された論文、学術的な著書、学会の発表要旨 (49本) を対象にその知見を概観。なお、三浦 (1999a) では、構築主義の課題として、「主観と客観の接合」の問題が扱われている。

8) この論文では、それぞれの研究主題の先行研究の知見を概観した後、それぞれの研究主題に沿って若干の課題を提示している。

9) これら6つのカテゴリーをさらに整理すると、①～③が「予防研究」、④が「介入研究」、⑤が「再生研究」、という3つの新たな枠組みに上位分類することが可能である。

10) 下田 (2014a) においても、下田 (2014b) においても、カウンセリングなどの心理学的支援のため、国内の心理学・教育学領域に限り、小中学生を

対象にした実証研究やレビュー論文の知見を整理。

11) ネットいじめについて独自の操作的定義を行ったものはなく、Raskauskas & Stoltz (2007) の定義では同一の研究者による3本、先行研究の定義が複数回用いられていることはなく、Beasley (n.d.)、Nancy (2007)、Ybarra & Mitchell (2004) の定義を引用しているのは1本ずつ。

12) 除外した対象(項目名)は、(1) 領域や属性としては、①宗教、②軍事、③労働、④経営、⑤金融、⑥経済、⑦企業、⑧職場、⑨家族、⑩属性。(2) 媒体や種別としては、①週刊、②月刊、③機関、④業界、⑤要旨、⑥報告、⑦講演、⑧書評、⑨座談、⑩商業。また、除外した対象(書誌名)は、①教育:『教育技術』『教職研修』など、②臨床:『児童心理』『教育と医学』など、③批評:『文部時報』『教委月報』など、④行政:『文部時報』『教委月報』など、⑤法令:『教育法』『ジュリスト』など、⑥別冊:『ハンドブック』『読本』など。

13) 久保田(2012)が指摘するように、多くの実証研究でいじめの行動や心理の「性差」が報告されている。そのため、その妥当性を含めて、ジェンダー研究を参照しつつ背景や過程を分析する必要がある。

14) いじめ現象に伴う「認知の困難性」と「確定の困難性」を指摘した上で、「いじめへの介入視点」では、外傷性障害の1つとしていじめを位置づけ、日本におけるいじめ研究(中井、1996;竹川、1993;瀬戸、1987)を概観し、心的外傷からの回復段階とエンパワーメントの重要性を指摘した。

15) 三浦(1998)が指摘したように、いじめの促進・悪化(ポジティブ・フィードバック)だけでなく抑止・改善(ネガティブ・フィードバック)の方向性もあるだろう。

16) 倉石(2001;2009)は、ある時期の教育実践における「言説の交代劇」を分析しているが、筆者は研究の知見を跡付ける方向を取る。

付記 この研究の一部は、JSPS 科研費 JP17K04631 の助成を受けたものです。

## 参考文献

Burr, V., 1995, *An Introduction to Social Constructionism*, Routledge. = 田中和彦 訳、1997、『社会的構築主義への招待』、川島書店。

藤生英行、2001、「<展望>いじめ(bullying)に関する諸外国の文献的研究」、『上越教育大学心理教育相談研究』1(1), pp. 139-159.

古田一雄編著、2017、『レジリエンス工学入門』、日科技連。

原英樹・濱口佳和、2002、「いじめ研究の測定法上の問題について」、『千葉大学教育実践研究』9, pp. 177-183.

昼田源四郎・松田久美子・四釜美和子・長嶺純子、1997、「「いじめ」研究の現状と課題」、『福島大学教育学部論集・教育・心理部門』62, pp. 71-88.

池島徳大、2009、「いじめの学校教育臨床的支援に関する一考察」、『学校教育実践研究』1, 25-37.

石飛和彦、1998、「ハロルド・ガーフィンケルのテキストにおける言説空間設定の問題」、『天理大学学报』187, pp. 127-142.

伊藤茂樹、1996、「「心の問題」としてのいじめ問題」、『教育社会学研究』59, 21-37.

伊藤智子、1998、「「いじめ」克服に関する心理学的文献展望」、『パイディア』6, pp. 45-50.

亀田秀子・会沢信彦・藤枝静暁、2014、「いじめ被害からの回復とその要因に関する基礎的研究(1)」、『教育研究所紀要』23, pp. 57-64.

亀田秀子・会沢信彦・藤枝静暁、2015、「いじめ被害からの回復とその要因に関する基礎的研究(2)」、『教育研究所紀要』24, pp. 67-76.

神村栄一・向井隆代、1998、「学校のいじめに関する最近の研究動向」、『カウンセリング研究』31(2), pp. 190-201.

神田光啓、1994、「「いじめ」の研究情報の検討」、『教育情報研究』10(2), pp. 7-15.

加野芳正、1997、「「いじめ」研究の分析視角」、『子ども社会研究』3, pp. 117-123.

小林英二・三輪壽二、2013、「いじめ研究の動向」、『茨城大学教育実践研究』32, pp. 163-174.

久保田真功、2012、「国内におけるいじめ研究の動向と課題」、『子ども社会研究』18, pp. 53-66.

倉石一郎、2009、『包摂と排除の教育学』、生活書院。

三浦恭子、1998、「「いじめ」に関する研究の展開と課題(上)」、『人間文化研究科年報』14, pp. 207-218.

三浦恭子、1999a、「「いじめ」研究における原因論的アプローチの検討」、『奈良女子大学社会学論集』6, pp. 335-344.

- 三浦恭子, 1999b, 「「いじめ」に関する研究の展開と課題(下)」, 『人間文化研究科年報』15, pp. 175-186.
- 三輪壽二・小林英二・渡部玲二郎, 2014, 「小・中学校におけるいじめ対策に関する研究の現状と展望」, 『茨城大学教育学部紀要・教育科学』63, pp. 341-353.
- 三宅俊治, 1997, 「「いじめ」研究の契機と発進」, 『国際社会学研究所研究紀要』5, pp. 109-135.
- 大野俊和, 2003, 「学校でのいじめに関する研究の再検討」, 『札幌国際大学紀要』34, pp. 21-29.
- Prasad, P., 2005, *Crafting Qualitative Research*, Aromnk. = 箕浦康子監訳, 2018, 『質的研究のための理論入門』, ナカニシヤ出版.
- 齊藤知範, 2000, 「第7章 いじめ研究の展望と課題」, 『学校臨床研究』1(1), pp. 55-66.
- 下田芳幸, 2014a, 「日本の小中学生を対象としたいじめに関する心理学的研究の動向」, 『教育実践研究』8, pp. 23-37.
- 下田芳幸, 2014b, 「小中学生を対象とした実証的研究におけるいじめの捉え方」, 『富山大学人間発達科学部紀要』9(1), pp. 35-49.
- 鈴木香織・上地勝, 2014, 「日本におけるいじめに関する研究の現状と課題」, 『茨城大学教育学部紀要・教育科学』63, pp. 509-526.
- 鈴木康平, 1995, 「学校におけるいじめ」, 『教育心理学年報』34, pp. 132-142.
- 鈴木康平, 2001, 「学校におけるいじめ問題への社会心理学的アプローチの吟味」, 『人間科学論究』9, pp. 1-16.
- 高旗浩志, 1997, 「教育実習生」をめぐる言説空間(1), 『島根大学教育実践研究』(9), pp. 125-147.
- 竹川郁雄, 1996, 「日本におけるいじめ現象の分析視点について」, 『犯罪社会学研究』21, pp. 79-92.
- 寺田豊徳・斉藤浩一, 2000, 「我が国における学校ストレスといじめの関連性についての研究動向と課題」, 『高知大学教育学部研究報告』60, pp. 333-340.
- 戸田有一, 2010, 「児童・青年の発達に関する研究動向といじめ研究の展望II」, 『教育心理学年報』49, pp. 55-66.
- 友清由希子, 2004, 「いじめ加害者について」, 『福岡教育大学心理教育相談研究』8, pp. 61-69.